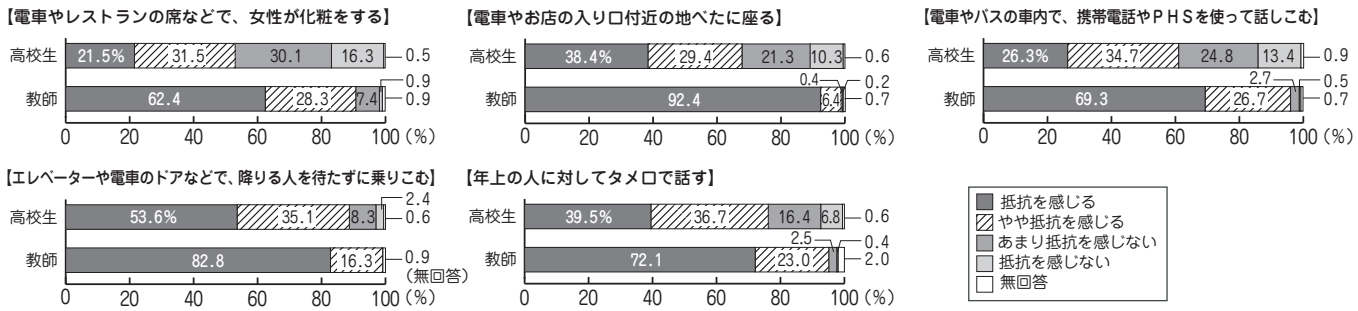
◯規範意識と問題行動 ～第１回～（全2回）

【1-1】高校生の規範意識、教師と 30 ポイント以上の差

■高校生と教師の規範意識



出　典：「現代高校生の規範意識」友枝敏雄・鈴木譲 編著／九州大学出版会（2003）
調査対象：福岡県内の高校２年生 2,117 名（公立７校、私立２校）、福岡県内の高校教師（有効回答数 551 票）

高校生の規範意識に関する調査結果をみると、「エレベーターや電車のドアなどで、降りる人を待たずに乗りこむ」という項目について、「抵抗を感じる」「やや抵抗を感じる」とする高校生が 88.7%、同じく「年上の人に対してタメ口で話す」ことについて抵抗を感じる高校生が 76.2%いることがわかる。割り込み・人の流れへの逆行という他人へのあからさまな迷惑行為や人間関係の配慮に関しては高校生の規範意識は高いといえよう。

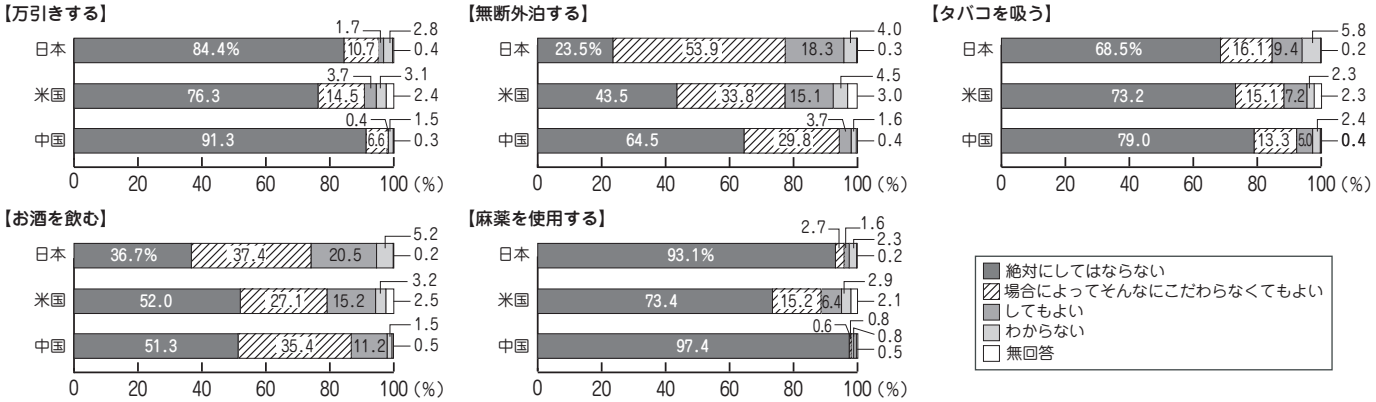
しかし、「電車やお店の入り口付近の地べたに座る」「電車やバスの車内で、携帯電話やＰＨＳを使って話しこむ」ことに抵抗を感じる高校生はそれぞれ 67.8%、61.0%と低くなり、「電車やレストランの席などで、女性が化粧をする」にいたっては、約半数の 53.0%にまで低下する。

一方、教師はどの項目についても90%以上が抵抗感を示しており、高校生の規範意識との間に顕著な差がみられた。とくに「電車やレストランの席などで、女性が化粧をする」（高校生 53.0%、教師 90.7%）、「電車やお店の入り口付近の地べたに座る」（同 67.8%、98.8%）、「電車やバスの車内で、携帯電話やＰＨＳを使って話しこむ」（同 61.0%、96.0%）では、いずれも 30 ポイント以上の開きがみられる。

これらは大人が若者のモラル低下やだらしなさを批判する際にあげられる行動であり、世代間の規範意識の差や迷惑行為に関する認識の違いがみてとれる。

【1-2】法律違反は×だが、無断外泊には寛容な日本の高校生

■高校生の規範意識（日米中比較）



出　典：「高校生の学習意識と日常生活－日本・アメリカ・中国の３ヶ国比較－」財団法人日本青少年研究所（2005）
調査対象：日本・アメリカ・中国の高等学校１～３年生（日本：11 校 1,320 人、アメリカ：12 校 1,020 人、中国：12 校 1,309 人）

高校生の規範意識に関する項目について日米中３か国を比較した結果をみると、「万引きする」「麻薬を使用する」という項目については、３か国とも「絶対にしてはならない」と回答した割合が 70%以上と高い値を示している。

「タバコを吸う」「お酒を飲む」「無断外泊する」の３項目については、「絶対にしてはならない」と回答した割合が、日本は米国、中国に比べて低い値となっている。とくに「無断外泊する」については、「絶対にしてはならない」と回答した日本の高校生は 23.5%と、米国（43.5%）に比べて 20 ポイント、中国（64.5%）に比べ 41 ポイントも低くなっている点は特徴的である。

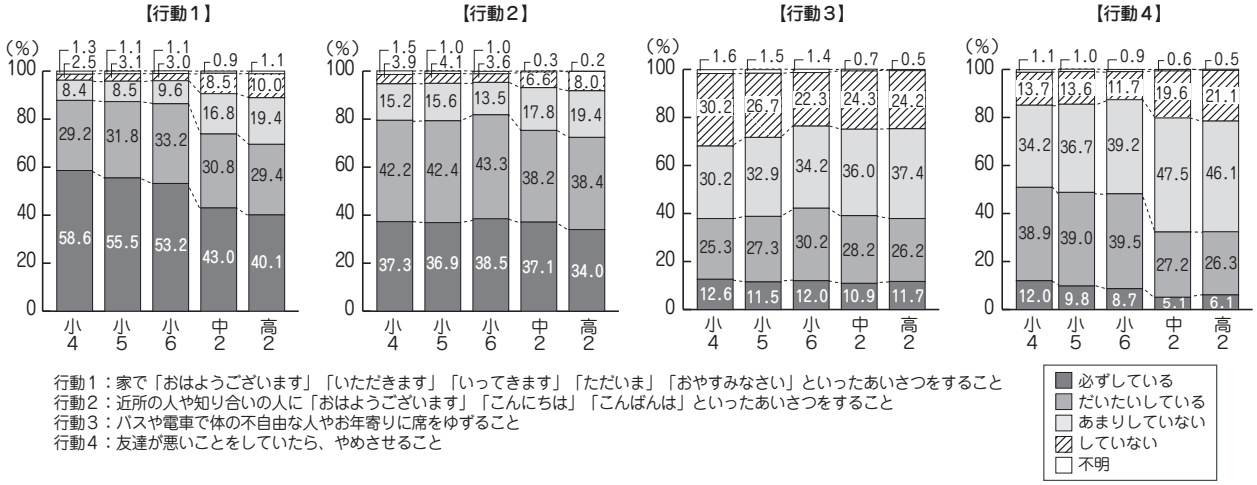
万引きやタバコ、麻薬、酒については法律で規制されているが、無断外泊については法律による絶対的な規制がないために、日本の高校生の意識が低く、学校や家庭でも強く規制したり、指導する機会が少ないのではないかと思われる。

また、「お酒を飲む」についても、「絶対にしてはならない」と回答した割合が日本は 36.7%と、米国（52.0%）、中国（51.3%）に比べてかなり低くなっている。日本は飲酒に関して寛容な社会であるといわれるが、高校生の意識にも影響しているものと思われる。

※データをご利用の際は、必ず出典（調査報告書名、刊行所名、刊行年）を明記してください。

【1-3】友だちの悪いことには見て見ぬ振りの中高生

■小中高生の道徳観・正義感に関係する行動



行動1：家で「おはようございます」「いただきます」「いってきます」「ただいま」「おやすみなさい」といったあいさつをすること
行動2：近所の人や知り合いの人に「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」といったあいさつをすること
行動3：バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること
行動4：友達が悪いことをしていたら、やめさせること

出　　典：「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター（2006）
調査対象：全国の公立小学校４～６年生、公立中学校２年生、公立全日制高等学校２年生（全体で 26,480 人）

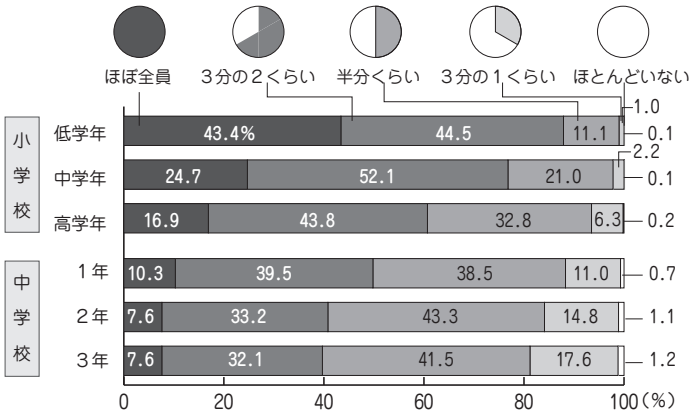
青少年の自然体験活動等に関する実態調査結果から、小中高生の生活習慣や道徳観･正義感に関する項目をみると、家や近所･知人へのあいさつを「必ずしている」「だいたいしている」割合が、どの学年、学校段階でも７～８割前後と、あいさつ習慣の定着度は高いといえる。しかし､家族へのあいさつに関してみると小学生では 80%以上が「必ずしている」「だいたいしている」と答えているのに対し、中学生では 73.8%、高校生では 69.5%と徐々に減少し、「あまりしていない」「していない」が２～３割に増える。生活の変化や反抗期などの影響であろうか。

「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること」については、どの学年、学校段階でも、「必ずしている」「だいたいしている」児童生徒が４割弱と、学校段階での差はあまりみられない。これに対して、「友達が悪いことをしていたら、やめさせること」は、小学生に比べて、中学生、高校生で「必ずしている」「だいたいしている」の割合が 15 ポイント以上減少している。ここにも、中学生、高校生の見て見ぬ振りの希薄な友人関係（『友人関係』第２回【2-3】参照）を垣間見ることができる。

【1-4】道徳の時間は楽しい？　学年とともに減少

■道徳の時間についての児童生徒のうけとめ

＊道徳の時間を「楽しい」あるいは「ためになる」と感じている児童生徒がどの程度いると思うかと学校に質問したもの



出　　典：「平成 15 年度 道徳教育推進状況調査の結果について」文部科学省（2004）
調査対象：全国の小学校 23,092 校、中学校 10,812 校

学校に対して、道徳の時間を「楽しい」あるいは「ためになる」と感じている児童生徒がどの程度いると思うかを質問した結果をみると、「ほぼ全員」と答えた割合は、小学校低学年では 43.4%、中学年では 24.7%、高学年では 16.9%となっており、中学校の第１学年では 10.3%、第２学年・第３学年では 7.6%と、学年が上がるにつれて減少していることがわかる。とくに中学校では、「楽しい」あるいは「ためになる」と感じている生徒が「ほぼ全員」または「3分の2くらい」を合わせても 50%に満たない。

また同調査では「道徳の時間の指導を一層充実させるために各教師に特に求められること」として、「教材の分析、魅力ある教材の選定及び開発・活用等の工夫」をあげている学校が、小学校では 67.4%、中学校では 69.7%ともっとも多く、教師が道徳の時間を「楽しい」あるいは「ためになる」という児童生徒を増やすために､教材研究を重要視していることがうかがえる。

※データをご利用の際は、必ず出典（調査報告書名、刊行所名、刊行年）を明記してください。